

# 逞筆模試

## ■第六回

二月六日

(一) 次の傍線部分の読みをひらが

なで記せ。①～⑩は音読み、⑪～⑳は訓読みである。

(30)  
1×30

- ① 百骸九竅の中に物有り。
- ② 漢文に詭譎あり、倭教に真鏡を説く。
- ③ 樞夫鴉鷺の鋤を携う。
- ④ 玉筍簇簇、森列して際なし。
- ⑤ 廢格泪訓窮治の獄用いらる。
- ⑥ 昆弟妻嫂目を側めて敢えて視ず。
- ⑦ 咎を悔いて其の譴黜に自歎す。
- ⑧ 備秀なる当代の碩学を招聘した。
- ⑨ 自ら簪纓を抛ち巷間の塵を蒙る。
- ⑩ 象嵌を施した香奩童靴を購う。
- ⑪ 席上に鬘鬘列ねて歎謙す。
- ⑫ 斜雨雪庇を瀾瀾す。
- ⑬ 柳岸鶯梭巧にして藍を織る。
- ⑭ 闌干たる誓字華夏の九天に冲る。
- ⑮ 青天閃爍して暉を停むる無し。
- ⑯ 肅肅たる鴝羽、苞栩に集まる。
- ⑰ 一闡提の輩は永く断滅せむ。
- ⑱ 英奇を仄陋に采る。
- ⑲ 萌簷長く掃きて淨くして苔無し。
- ⑳ 鳥啼虫吟沾沾として自ら喜ぶ。
- ㉑ 血を瀝ぎて以て辞を書す。
- ㉒ 孝子圖しからず、永く爾に類を鋤う。
- ㉓ 薑を擲てずして食らう。
- ㉔ 身もまた稷契の列に廁じらんと欲す。
- ㉕ 水仙や鵲の草茎花咲きぬ。
- ㉖ 父兄の烈に仗りて割拠せり。
- ㉗ 数学理学に思を覃むる。
- ㉘ 謀洵るれば事に功なし。
- ㉙ 癘が落ちたように呼び鈴に応じた。
- ㉚ 沙丘鉅鹿を去ること劔三百里。

# 解答難度指数 1.91

(二) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。㉑、㉒は国字で答えること。

(40)  
2×20

- ① 親に似てキチヨウメンな子だ。
- ② 美しい花卉をテンテイした庭。
- ③ 慙愧に堪えず自らをタシナめた。
- ④ 対策を講じて経営のヨゼンを保つ。
- ⑤ 旅籠で按摩とヤイトを頼んだ。
- ⑥ 枝もタワわに積もった雪。
- ⑦ いささかのオモヤツれが見える。
- ⑧ 海上にシンキロウが出現した。
- ⑨ 大きなクシヤミをした。
- ⑩ 政界のヌエが通り名になっている。
- ⑪ 駿駿として遙かなるクカジを駆ける。
- ⑫ 同僚をイシして空威張りを通す。
- ⑬ 史学叢書のハンエツに明け暮れる。
- ⑭ 合点してハタと膝を打った。
- ⑮ 賑やかな盃のケンシユウが始まる。
- ⑯ 自家のケンシユウは自家知る。
- ⑰ 初めて大儒と交わりをテイす。
- ⑱ 根を深くしてテイを固くする。
- ⑲ セガレに家督を譲る。
- ⑳ テシグラム単位の正確さを要求した。

(三) 次の1～5の意味を的確に表す語を、次の□から選び、漢字で記せ。

(10)  
2×5

- ① 人の善心を害する根本的な煩惱。
- ② 王座を強奪する。
- ③ 心身のけがれを取ること。
- ④ 兄弟姉妹。特に高貴の人という。
- ⑤ 書物を刷って世に出すこと。

きょうかく・こくし・さいもく  
さんい・しんろう・とんじんち  
はつだ・れんし

(四) 次の問1と問2の四字熟語について答えよ。

(30)

問1  
次の四字熟語の(①～⑩)に入る適切な語を次の□から選び漢字二字で記せ。

(20)  
2×10

- |        |    |     |
|--------|----|-----|
| (①) 致誠 | 蹇蹇 | (⑥) |
| (②) 満車 | 瑣碎 | (⑦) |
| (③) 燕説 | 片言 | (⑧) |
| (④) 浅掲 | 冷土 | (⑨) |
| (⑤) 舐痔 | 天保 | (⑩) |

えいしよ・がんあい  
きゆうじよ・こうたい・さいじ  
しんれい・せつごく・せんよう  
てきか・ひきゆう

### 問2

次の①～⑤の解説・意味にあてはまる四字熟語を後の□から選び、その傍線部分だけの読みをひらがなで記せ。

(10)  
2×5

- ① 下級の役人。
- ② 言い出した者から実行すべきだ。
- ③ 母と子の気持ちを通じ合うこと。
- ④ 助け合つて成り立つ間柄のたとえ。
- ⑤ 痛惜に堪えず激昂すること。

先從隗始・唇亡齒寒・慧以明珠  
合歡綢繆・偏袒扼腕・噬指棄薪  
鬼哭啾啾・抱閔擊柝

(五) 熟字訓・当て字の読みを記せ。

- ① 淋滲
- ② 鈿釐
- ③ 沢瀉
- ④ 地錦
- ⑤ 旋花
- ⑥ 胡籙
- ⑦ 鳳尾松
- ⑧ 剪秋羅
- ⑨ 酢漿草
- ⑩ 金襖子

(10) 1×10

(七) 次の①～⑤の対義語、⑥～⑩の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。□の中の語は一度だけ使うこと。

- ① 末班
- ② 団欒
- ③ 相見
- ④ 滋潤
- ⑤ 軽科
- ⑥ 有隣
- ⑦ 猷芹
- ⑧ 化野
- ⑨ 別嬪
- ⑩ 芟夷

(20) 2×10

(八) 次の故事・成語・諺のカタカナの部分で漢字で記せ。

- ① 禍いはシヨウシヨウの内より起こる。
- ② コシユを編む。
- ③ ケイカクの欲。
- ④ 壁を完うしてチヨウに帰らん。
- ⑤ 南人ヲを夢見ず、北人象を夢見ず。
- ⑥ 大は棟梁と為し、小はスイカクと為す。
- ⑦ 王良車に登れば馬にヒドなし。
- ⑧ 桜三月、シヨウフは五月。
- ⑨ リヨウチユウ葵菜に徂るを知らず。
- ⑩ アツウンの曲。

(20) 2×10

(六) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを(送りがなに注意して)ひらがなで記せ。

- ア ① 添削…② 刪る
- イ ③ 育鞫…④ 鞫まる
- ウ ⑤ 銜鬻…⑥ 銜る
- エ ⑦ 遶梁…⑧ 遶る
- オ ⑨ 圓鑿…⑩ 圓い

(10) 1×10

(九) 文章中の傍線(1.～10.)のカタカナを漢字に直し、波線(ア～コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。

(30) 2×10 1×10

**A** 立山火山脈は、越後、信濃の境界なる巖岳に起こり、花崗岩の地帯をア踰て、南の方越中、信濃の境界なる鹿島鍾ヶ岳を崛起し、鹿島鍾ヶ岳より更に花崗岩の地帯を距て、越中の東境に沿い立山イサイを崛起し、南走して信濃、飛騨の境界を限れる焼岳、硫黄岳、乗鞍岳、御岳に到るもの。想う后土の大活力、日本本州中部の地骨たる大花崗岩帯を破りてイ逸逸し、立山火山脈を聳出す、故に此の脈や、他の山系と特立して、越、信、飛の境界に

**B** 先生は常州水戸の産なり。其の伯は疾み其の仲は天す。(…中略…)声色飲食其の美を好まず、エ第宅器物其の奇を要めず、有れば有るに随つて棄背し、無ければ無きに任せて晏如たり。オ蚤くより史を編むに志あり、然れども書の微とすべき稀なり、爰に搜り爰に購い之を求め之を得、微遶(※少しく遶ぶ)するに、ハイカン小説を以てし、実を撫い疑わしきを闕き、皇統をセイジュンし人臣を是非し、輯めて一家の言を成せり。元禄庚午の冬、カ累りに骸骨を乞うて致仕す。初め兄の子を養うて嗣と為し、遂に之を立てて以て封を襲がしむ。先生の宿志是に於いて足れり。既にして郷に還り、即日攸を瑞龍山セウエイの側に相し、歴任の衣冠魚帯を瘞め戴ち封じ戴ち碑し、自ら題して梅里先生の墓と曰う、先生の靈永く此に在り。嗚呼骨肉は天命の終る所の処に委せ、水には則ちギョベツに施し、山には則ち禽獣に飽かしめん、何ぞ劉伶の鍤を用いんや。其の銘に曰く、月は瑞龍の雲に隠ると雖も光は暫く西山の峰に留まらん、碑を建て銘をフロクする者は誰ぞ、源光圀字は子龍。

(志賀重昂「日本風景論」より)

**C** 天地正大の気、粹然として神州に鍾まる。秀でては不二の岳となり、巍巍として千秋に聳ゆ。注いではキ大瀛の水となり、洋洋として八州を環る。発いては、Bハンダの椽となり、衆芳与に儔し難し。凝つては百鍊の鉄となり、銳利鑿を断つべし。蓋臣(※忠臣)皆ク熊羆、武夫尽く好仇。神州誰か君臨し給う、万古天皇を仰ぐ。皇風六合に洽く、明德太陽に伴し。世汚隆なきにあらず、正氣時に光を放つ。乃ち參す大連の議、侃侃ケ鬻鬻を排す。乃ち助く明主の断、焰焰伽藍を焚く。中郎嘗て之を用い、ソウシヤ盤石安し。清丸嘗て之を用い、妖僧肝胆寒し。忽ち揮う龍口の劍、虜使頭足分かる。忽ち起こす西海の颯、怒濤妖氣を瀦くす。志賀月明の夜、陽に鳳釐の巡を為す。芳野の戦い、タケナワなるの日、又帝子の屯に代わる。或いは投ぜられ給う鎌倉の窟、憂憤止に慎憤たり。或いは伴う桜井の戦、遭訓何ぞ慇懃なる。或いは徇う天目山、幽囚君を忘れず。或いは守る伏見城、一身万軍に当たる。

(徳川光圀「梅里先生の碑陰並びに銘」より)

(藤田東湖「文天祥正氣の歌に和す」より)